

~~~~~

# 日本ギヤスケル協会

## 第28回 大会

2016年10月1日(土) 東北大学 東京分室 (サピアタワー10階・会議室 AB)

~~~~~

開会の辞 13:00~13:05 日本ギヤスケル協会会長 鈴木 美津子 (東北大学名誉教授)

シンポジウム 13:10~15:30 「モダンの萌芽を探して—女性、労働、ホーム」

「ギヤスケルは「自分だけの部屋」を望んだのか？」

司会・講師 松村 豊子 (江戸川大学教授)

「新たなライフデザインを探して：『妻たちと娘たち』を造園ビジネスの視点から読む」

講師 池田 晶子 (江戸川大学客員教授)

「Gaskell と Bowen における ‘home’—*Mary Barton* と *Last September* をとおして—」

講師 鈴木 哲平 (江戸川大学専任講師)

「ヴェラ・ブリテン『若者の証』における「働く」女の「成長」小説」

講師 松永 典子 (帝京大学専任講師)

総会 15:40~15:55

司会 石塚 裕子 (事務局長・神戸大学教授)

講演 16:00~17:10

司会 松本 三枝子 (愛知県立大学教授)

阿部 公彦 (東京大学准教授) 「小説家の礼儀作法」

閉会の辞 17:10~17:15

日本ギヤスケル協会副会長 大島 一彦 (早稲田大学教授)

懇親会 17:45~19:45

会場：「神戸屋レストラン」丸の内店 (丸の内オアゾ地下1階)

会費：5,000円

\* \* \* \* \*

事務局：〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1 神戸大学大学院国際文化学研究所 石塚裕子研究室

日本ギヤスケル協会事務局：secretariat@gaskell.jp

HP：http://www.gaskell.jp/

※会員以外の方の参加も歓迎いたします。

松村豊子「ギaskellは「自分だけの部屋」を望んだのか？」

女性が作家になるためには年収 500 ポンドと「自分だけの部屋」が必要であるというヴァージニア・ウルフの言葉はあまりにも有名だが、ギaskellは「自分だけの部屋」をどのように考えていたのだろうか。〈女性〉〈労働〉〈ホーム〉を基軸にしてギaskellとウルフの二人の作品を読むと、ギaskellが好んで描いた労働者階級の生活や家父長的な家庭に対してウルフは終始否定的である等々の比較対照項目が多いことが分かる。『自分だけの部屋』はケンブリッジ大学の女子学生を対象にした講演原稿を書き下ろした作品だが、ここではギaskell作品の中では最も知性的で自立心に富んだヒロインが登場する『北と南』に着目し、作家ギaskellが「自分だけの部屋」をどのように考えていたかについて論じたい。

池田晶子「新たなライフデザインを探して：『妻たちと娘たち』を造園ビジネスの視点から読む」

『妻たちと娘たち』がギaskellの他の作品と一線を画するのは、産業革命後の変化の時代において、新しいライフスタイルを模索する老若男女の悲喜劇が貴族・地主の壮大な庭園を背景として静かに描かれていることである。イングランド中部の緑豊かな田舎町にはマンチェスターを髣髴とさせる近代産業や都会の喧騒はなく、人々は科学技術の進歩発展を労使紛争や殺人といった暴力的な出来事ではなく日常茶飯事として受け入れ、伝統の継承に心血を注いでいる。このようなヴィジョンを確立したギaskellはどのような作家だったのか。造園ビジネスの視点からこの作品における庭園・植物の描写を読み解き、小説家ギaskellが冒険心に富んだビジネス・ウーマンであることを検証したい。

鈴木哲平「Gaskell と Bowen における ‘home’——*Mary Barton* と *Last September* をとおして——」

Elizabeth Bowen (1899-1973) は *Last September* (1929) で、独立戦争下を生きるアイルランドの中産階級を描いた。ビッグハウスが炎上する最後の場面はアセンダンシーの ‘home’ の喪失を象徴する。一方 *Mary Barton* (1848) のラストシーンでは、Mary が新天地を求めて生まれ育った Manchester を去り、父の親友の妻 Jane とその子 Jem とともにカナダへ渡る。

ここに見られる、この世のどこかに自らの安住できる ‘home’ があるはずだという希望は、大戦間期になると現実感を喪失していき、‘home’ の希求は現実の土地や場所ではなく、自己の内部へと向けられる。越境、複言語による執筆、無意識の探求といったいわゆるモダニズム的な動向が、‘home’ の希求と喪失に根差しているということを、*Mary Barton* と *Last September* の比較から、素描してみたい。

松永典子「ヴェラ・ブリテン『若者の証』における「働く」女の「成長」小説」

文学史上、一九世紀において特徴的な文学形態と見なされる教養小説であるが、近年、モダニズム文学においても研究が進展している。こうした研究動向を踏まえて、女性文学における教養小説／成長小説の系譜を、エリザベス・ギaskellの『シャーロット・ブロンテの生涯』とヴェラ・ブリテンの『若者の証』の両作品から考察する。両者に共通するのは、前者はいわゆる社会小説作家として、後者は第一次大戦において VAD を経験した作家として、ともに働く女および書く女を描いた点である。本発表では、両者から女性教養／成長小説の（不）可能性を考察することによって、ポストフェミニズムと呼ばれる今日にもとめられる女性文学とは何かを探りたい。

講演 16:00～17:10

### 阿部公彦「小説家の礼儀作法」

小説には必ず決まり事がある。たとえば「この語り手はときどき嘘をつきます」とか「この語り手は読者をバカにしています」とか「この作品は朦朧としていて、何だかよくわからなくていいのです」など。私たち読者は、語り手と一種の契約関係を結び、そのルールを受け入れることで読書を進める。これは、初対面の人間同士が「はじめまして」と挨拶をかわし、相手との付き合い方を模索する過程と似ている。

本発表では、エリザベス・ギヤスケルやジョージ・エリオットなどの作品を通してこの「模索」の過程について考える。他者との遭遇や付き合い方をめぐる作法がどのように作品に組み込まれているか、そこからどのような「礼儀作法」が見て取れるかを確認したい。

### 大会会場

東北大学東京分室（サピアタワー10階・会議室AB）〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-7-12

\*入館に際しては、3階団体受付（ギヤスケル協会専用）にて、お名前、ご所属をお伝えの上、入館カードをお受け取りください。詳細に関しましては、同封の「入館のご案内」をご覧ください。

### アクセス

- JR 東京駅直結
- 東京メトロ大手町駅  
B7 出入口直結（東西線、千代田線、半蔵門線）





**懇親会会場**

「神戸屋レストラン」丸の内店  
 東京都千代田区丸の内 1-6-4  
 丸の内オアゾ (OAZO) 地下1階  
 TEL 03-5220-5011

- ・JR「東京駅」下車 丸の内北口
  - ・東京メトロ東西線「大手町駅」下車 (B2-C 出口より 徒歩1分)
- \* JR東京駅丸の内北口と東西線大手町駅を結ぶ地下自由通路に面しています。

会費：5,000円  
 時間：17:45～19:45

